

冊

図書館だより

12月



あっという間に12月。街ではもうクリスマスの飾りがあちこちで見られるようになりました。そのような今日この頃・・・
 読書週間最終号をお届けします！ST・Sコースから始まりAコース、そしてラストを飾るのはBコースの先生方と、校長先生をはじめとするコース外の先生方からの推薦図書です。70名中59名の先生方からの推薦図書は、多彩なジャンルと素敵な紹介文に溢れていて、皆さんのこれからの人生にきっと大きな影響を与えてくださるスペシャルな59冊となるとと思います。紹介してくださいました先生方に、今度は生徒の皆さんから「この本、先生にお薦めします」と逆にお薦めしてみたいと思います。紹介してくださいました先生方に、今度は生徒の皆さんから「この本、先生にお薦めします」と逆にお薦めしてみたいと思います。

五月女 修

『心に響く小さな5つの物語』

藤尾秀昭著 致知出版社

月刊「致知」という雑誌があります。その中から選ばれた“心に響く話”5つが6年前に一冊の本になりました。薄くてすぐ読み終わります。目標を見失いそうな人、人生に疲れてしまった人、気分転換をしたい人・・・特にお勧めします。



川村 真一

『解くだけで人生が変わる！修造ドリル』

松岡修造著 アスコム

今の自分が嫌いだ！今の自分を変えたい！という人におすすめの本です。この本は、よい習慣を身に付けて、良い方向に自分を変えることを松岡修造流習慣術を紹介していく本です。中には、「修造だからできることだろ」と思う内容もあるかもしれませんが、一つ一つに意味があり、とても参考になります。松岡修造さんみたいに元気でパワフルな毎日を過ごしたいものですね。



滑川 良子

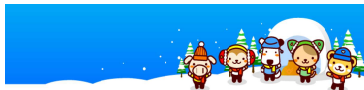
『王妃の館 上下巻』

浅田次郎著 集英社

「人生は小説より喜劇なり」という帯のキャッチコピーのような話です。パリのヴォージュ広場に面するホテル「シャトー・ドゥ・ラ・レーヌ（王妃の館）」に滞在するツアーが光りツアーと影ツアーのダブルブッキングならぬダブルで実施される話です。



とにかく読んでみるとおもしろく、登場人物のキャスティングが独特です。話もダブルでルイ14世の跡継ぎの話も出てきて、さらに話は複雑です。とにかく読んでみて下さい。



大塚 義典

『もう一回蹴りたかった』 望月重良著 ぴあ

元サッカー日本代表で、各年代でも代表に入っていた有名選手の「望月重良」選手が「突発性大腿骨頭壊死症」になり、選手生命を断たれてしまう実話である。それでもサッカーが好きという根本的な部分を忘れることが出来ず、復帰、また違う形で大好きなことに関わり続ける努力など、夢を追う人達に共感できる作品です。是非読んでみてね。

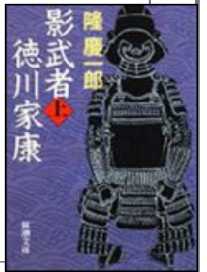


宮崎 勝美

『影武者徳川家康 上下巻』

陸慶一郎著 新潮社

歴史上の関ヶ原の戦いで勝ったのは影武者という発想が面白い。この本を読んでいくうちに、もしかしたらあり得ると思えた。本の後半は、柳生を絡めた秀忠との対決でいつも二郎三郎(影武者)が勝ち、とても愉快だ。ぜひ読んで...



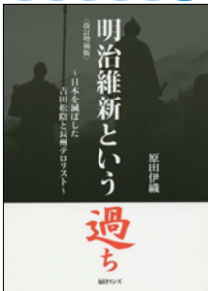
秋山 康夫

『明治維新という過ち【改訂増補版】』

—日本を滅ぼした吉田松陰と長州テロリスト—

原田伊織著 毎日ワンス

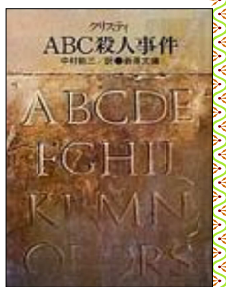
「明治維新は、薩摩藩・長州藩の下級武士が日本の植民地化から救った壮大な事件である」という「正史」は事実だろうか。当時の覇権国イギリスが、世界戦略として自国の麻薬業者を使い、背後から倒幕(クーデター)をさせた説がある。そうならば、「歴史は勝者がつくる」と言われるが、明治維新に関しては当てはまらない。



網代 匡行

『ABC殺人事件』 アガサ・クリスティー著 新潮社

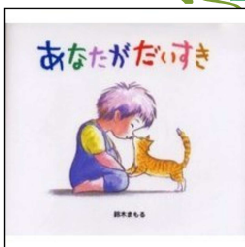
探偵ポアロシリーズの作品。文末に「ABC」と署名された挑戦状が届き、Aで始まる町のイニシャルA、Bで始まる町のイニシャルBの人が次々と殺害されていく。果たして犯人は愉快犯なのか、それとも明確な目的を持っているのか。ポアロが事件の真相にせまっていく。



小澤 光志

『あなたがだいすき』 鈴木まもる著 ポプラ社

「あなたがだいすきです」の絵本は、子供を無我夢中で育てているときは感じられず、育て終えてふと振り返ると懐かしく思います。絵本の中で『わたしは、あなたがだいすきです。あなたがいるだけで、わたしはしあわせ、たいせつなあなたへ、心から伝えたい「だいすき」な気持ち。』という言葉には感動しました。また、あたたかい絵とやさしい文字で喜びを伝える絵本とともに当時にもどり子供を育てなおしたい気持ちになられる絵本のような気がします。



深谷 昌史

『どろろ』 手塚治虫著 朝日出版

ある国の戦国時代、父親の天下統一という野望のために身体を奪われ、取り戻す旅をする主人公”百鬼丸”、戦で両親を奪われ、仇を討つため旅をするもう一人の主人公“どろろ”の奪われた身体と心を取り戻す物語です。争いの時代に絶望的な運命を背負った2人が懸命に明るく生きていく姿からは希望と生きる気力がもらえます。



中原 昭校長

『藝術立国』 徳山詳直著 幻冬舎

吉田松陰の魂を受け継ぐべく奮闘した徳山詳直の一代記です。アイディアリズムのない国は滅びゆく国である。人は海に向かって旅立つ勇気が必要。海とは理想であり、志であり、ロマンです。解のない時代だからこそ、荒海に向かう船の船先にたって旗振りをする徳山先生に大いに発奮させられる一冊として推薦します。



矢野 正彦教頭

『天才の栄光と挫折』 藤原正彦著 文藝春秋

天才と聞くとどんなに素晴らしい人かと思う。人生も順風満帆で悩みなど無い人かと思う。しかしこの本を読むと天才ほど苦悩も深く劣等感も深いことが分かる。自分だけが苦しいのでは無く、天才といえども悩みながら人生を送っていることが分かったら自分の人生も楽になると思った一冊である。



海老沢 宏子

『風が強く吹いている』

三浦しをん著 新潮社

高校時代に「何か」夢中になるものがあるのは幸福なことです。大学生の素人集団が、箱根駅伝出場を目指すという無謀な話です。ただ走ることが好きで、集団でワンチャンスに賭ける情熱、ひたむきさ、孤高の日々の練習、頼みは自分の足のみです。色々な青春ドラマを想像して、正月のTVを楽しむのも一つの方法かもしれません。



木村 幹雄

『天平の薨』 井上靖著 新潮社

読書が君を変えられる全てではないが、一つの大きな手段であることは間違いない。脳の柔らかい君たちに、さあ何を薦めようか。新しい何か形作っていくということは、かくも強く信念を持ち続けなければならないことを学び、これからの人生に勇気をくれるかも知れない。こんな本を読んで、秋の夜長、天平の時代に思いを馳せてはどうだろうか。



海野 貴人

『生きてます、15歳。』

井上美由紀著 ポプラ社

500gの超未熟児として生まれた全盲の女の子と母の15年を綴った実話である。母は全盲の娘を育てるため幼い頃からあえて厳しく接し、時には手をあげながら育てた。全盲の娘と母が、激しくぶつかり合いながらも、本気で正面から向き合おうとする姿から、親の子に対する無償の愛について考えさせられる一冊である。

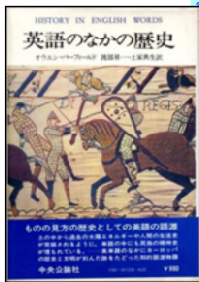


安 めぐみ

『英語のなかの歴史』

オウエン・バーフィールド著 中央公論社

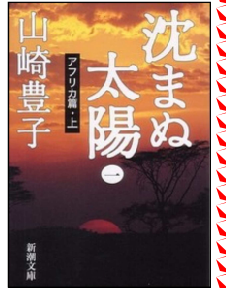
英単語の中にヨーロッパの歴史と文明が刻んだ跡をたどった語源物語。近代のイギリスで、例えば伝説とのかかわりでは、英語とは発音をひどくした伝説だとか、イギリス人が大好きなsportは自分自身を通常の仕事の方向とは違った方向へと運ぶという意味の伝説disportの短縮形だなど、とても興味深い話を発掘した気分になる。



金沢 成奉

『沈まぬ太陽』 山崎 豊子著 新潮社

1987年に起きた日航機墜落事故を題材に一人の主人公が大企業の権力に負けずに生き抜く姿を描いた山崎豊子の代表作です。高校生には少し難しい本かもしれませんが、私自身、やりきれない場面や苦難にあったときにこの本の主人公の様にあきらめずに一步一步進む姿を思い出して乗り越えてきました。勇気をもらえる本だと思います。



御代 昌代

『最後だとわかっていたら』

ノーマ・コーネット・マレック著 サンクチュアリ出版

「ありがとう」「大好きだよ」「ごめんね」「許してね」一番伝えたい気持ちこそ、面と向かったら伝えられないことがありますよね。私はこの本を読み終わる度に、涙が溢れます。時々読み返して、素直になれない自分を振り返っています。あなたがもしこの本を読んだなら、読み終わった後の気持ちを大切にしてくださいね。



戸澤 衣津見

『スタンフォードの自分を変える教室』

ケリー・マクゴニガル著 大和書房

私たちの中にはいくつかの自己が存在しています。さまざまな自己をコントロールするという事は自分自身の一面を理解できるようにするという事です。この本は心理学や神経科学、医学から自己コントロールに関する見解を取り上げています。良い習慣の身につけ方やストレスとの付き合い方など説明されているのでお薦め致します。

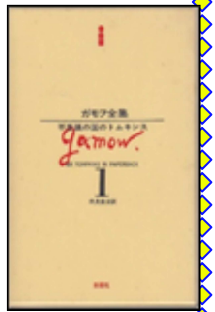


鈴木 幸男

『不思議の国のトムキンス』

ジョージ・ガモフ著 白楊社

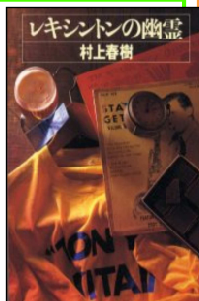
今年もノーベル物理学賞を梶田隆章さんが受賞しました。受賞内容はニュートリノの研究とか。このように小さくて高速で動いている物質は、私達が知っている世界の常識とはまったく考えられない動きをします。そのような世界に人間が行ったらどうなるかについて説明してくれる本です。将来物理学を学びたい人には是非勧めます。



池田 由里子

「沈黙」(『レキシントンの幽霊』収録) 村上春樹著 文藝春秋

村上春樹は嫌いだ。作品から時折漂う生臭さや、夢か現(うつ)かわからない感じが気に入らない。でもこの作品はちょっと違う。集団の中で生きている私たちにとって実際に起こりえる現実的な物語だからだ。身近に潜む「悪意」。その悪意のため、主人公の大沢は高校生活最後の半年間を無為に過ごす。大沢が最後に語る言葉には、思わず自らを省みざるをえない。



来年も、みなさんが
素敵なお本とたくさん
出会えますように！